

オプション教材は勉強に余裕があるときに取り組んでいただく教材です。

グ
ミ

オプション教材グミ 読解マラソン集

読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

3.

5.

2.

4.

近代から現代にかけての社会は、老人にとつて決して生きやすい場ではない。なぜそうだったかを考えると、わたしたちは進歩とか効率性といった近代社会の原理にぶつかることになる。

資本主義的な生産様式が全社会に浸透していく近代世界にあつては、生産性の進歩と向上が生産現場においてだけでなく、生活のあらゆる面で求められるようになる。スポーツがいい例だ。スポーツはそれ自体がなにかを産みだす生産活動ではなく、体のこわばりをほぐし、合わせて精神の緊張をもほぐす気晴らしの遊びのだが、近代の原理がそこにも浸透し、その結果、勝敗にこだわって真剣に訓練を積み、技術的にも体力的にも進歩・向上をめざすことが大切だと考えられるようになる。金もうけを目的とするプロスポーツならともかく、競技を楽しみつつ体の調子を整え、健康を維持するのが目的の遊戯スポーツまでが、体に無理を強いても勝つことを求めるものに変質しかねない。勝つか負けるかと、楽しいかどうかとはそう簡単に結びつくものではないのに、勝ち負けこそが楽しさの基準だとする錯覚が、社会的な力をもつてくる。勝つことを最優先し、勝つために効率性・合理性を追求することがスポーツを楽しむことだ、と、競技者自身が思いこむようになるのだ。

進歩や向上を求めることは、ある限られた場では大いに意味のあることだが、そうした気運が社会全体に広がりを見せるようになったとき、そんな社会が老人にとつて住みよい場であるはずがない。老人の暮らしとは、とくに体を動かすという場面において、進歩・向上を期待できず、むしろ停滞と退行を余儀なくされるような暮らしなのだ。

(中略)

老いをめぐる関係性の变化としては、大きく二つのことが考えられる。

一つは老人相互の関係性の变化だ。前線を退いた人は、前線にいたときに組みこまれていた人間関係を外れていったんは孤立する。が、そうした人びとの数がふえれば、たがいに接触する機会も多くなる。仕事を媒介にするのではなく、遊びや楽しみを媒介にした関係が生じ、競争や効率にとらわれないつきあいのなかで、人柄や経験の触れ合いが生じる。近所の道端で老人同士のそういう交流を

よく見かけるし、やや遠く、奥武蔵や秩父の山登りや、都心の美術館や社会人向け大学講座やカルチャーセンターなどで、いまを楽しみつつ、たがいの来しかたを確かめ合う老人たちのすがたをしばしば目にする。ながめるこちらをもほつとさせるような安らぎが、そこにはある。

人間関係の変化として、もう一つ、老年と若年の関係性の变化が考えられる。進歩・競争・効率を至上命令とする仕事の論理は、働きの度合によつて人を序列化する傾向が強く、勢い、働きの少ない老人は軽視されるが、仕事の論理は社会を覆いつくすものではなく、覆いつくせば社会がcaえて不幸になることにわたしたちは気づきはじめている。不幸の自覚が深まれば、老人の寂寥感は、まだ老いには至らない人びとにも寂寥感として受けとめられ、寂寥感の克服が社会全体の課題とならずにはいない。個人がさまざまな他人とともに社会をなして生きていくということは、他人の寂寥感をなにもか自分のものとして感じることをぬきにはありえず、大きくいえば、人間はどのようにして共同の歴史を作りあげてきたのだ。

じいさんやばあさんの炉端の昔話も、長屋のご隠居さんの悠々自適の生活も、それぞれに人間の共同の歴史の一齣なのだ。社会の近代化と家庭の核家族化はいまだ進行途上にあるから、炉端の昔話や長屋のご隠居さんの再生は期待できないが、近代化や核家族化が老人の孤立と寂寥感を強めるのではなく、老若の新しい経験の交流を促す方向へとむかう可能性は十分にある。そして、課題が課題として提示されたとき、課題克服の可能性をつねに追求してきたのがこれまでの人間の歴史だったし、今後もそれは変わらないと考えてよい。老若の交流が多くの場面で自然に、さりげなく、おこなわれるようになったとき、その社会は老いを楽しめる社会といえるだろう。

(長谷川宏『高校生のための哲学入門』による)



のみならずシドニーのゲームを見て感じるのだが、今後スポーツがさらに国威発揚と無縁になるのは、どんな政治の意図も及ばない時代の趨勢のように思われる。現代では、国家が国威発揚をめざせばめざすほど、その国家の意味が変質するという逆説が働くらしいのである。たまたま目に触れた野球の試合のなかで、オランダ・チームのほとんど全員が黒褐色の肌をしていたのが、示唆深かった。この選手たちはもちろんオランダ国民であるが、歴史的な背景を考えればそんなに古い国民であるはずがない。彼らが移民の初代か二代目かは知らないが、強いチームを送ろうとすれば、国家はそういう新しい国民に頼るほかはない。伝統的な多民族国家はいわずもがな、この日本ですら今回は二人の中国生まれの選手の力を借りているのである。(中略)

そう思ってからに根本を振り返ると、もともと近代スポーツが工業化と国民国家の時代に生まれ、長らく国の政治や経済の力の象徴と見なされてきたことが不思議であった。さらにいえば、スポーツが現実的な力や効率を連想させ、進歩や拡大のイメージと結びつけられていたことが異様であった。なぜなら、スポーツはその本質において、むしろ人間の総合的能力を制限することのうえに成り立つ技芸だからである。それはとりわけ近代において、技術は深く磨くと現実的な効用を失うという逆説のうえに立っている。早い話が人間が走る能力を特化して訓練すると、その壊れもののような俊足は日常の役には立たないものに変質する。そもそも人間が足で走ろうと考えること自体、この自動車文明の時代に、現実的な効用を無視することを意味しているはずである。

けだし国民国家の近代化は、いわば目的のために手段を選ばぬ精神によって進められてきた。中核となる工業化そのものが目的至上主義であって成果のためには刻々に手段を取り替えることによって成長を続けてきた。人間の能力を含めて、あらゆる手段は陳腐化されるのが宿命となり、むしろその陳腐化によって発展が保証されるのが工業化であった。人間の身体能力についても、重用される側面があわただしく変わるばかりか、全体として軽視されるのが科学

技術の歴史であった。そしてほとんど奇跡のようにこの歴史と並行してそれに逆らって育ってきたのがスポーツなのである。それぞれの個人が特定の身体能力に固執し、それだけを磨きぬくことで、本来は手段であるものを目的にしてしまいう文化である。スポーツはあたかも工業の精神をあざ笑うように、あえてそれにとつて無用の能力を極限までのばしてきた。

このスポーツの文明的な意味は、ちやうど芸術の場合と同じく、時代精神の欠陥を癒す補完物としてしか考えられない。極端な効用と効率の時代に、それに抵抗して文明の健全さを保つ緩衝材としての意味しか考えられない。だとすればますます奇怪なのは、そのスポーツの強さが国力の表現として錯覚され、愛国的な熱狂の対象とされてきたことである。どう見ても過去百年、人類は国家観の狐に憑かれていたのであり、集団ヒステリアの悪夢にうなされていたのにちがいない。ようやくその悪夢が醒めはてた今、スポーツと国家は初めて健全な関係を結びつつあるように見える。オリンピックは今も各

国の国旗のもとに闘われているが、その国旗はもはやあの神聖で宿命的な国家のイメージを表していないからである。オランダの黒人選手や中国生まれの日本選手にとつて、国家はもはや神話や文化伝統によって結ばれた共同体ではない。それは法と制度によって彼らの権利を守り、よい生活とスポーツの環境を保証する合理的な機関である。また世界の選手が闘う柔道競技は、もはや生まれつきによってしか理解できない民族文化ではない。それをなお現在

(山崎正和『世紀を読む』による)



グローバリゼーションが、少数の新しい「言葉をもつ」人々と、多数の新しい「言葉をもたない」人々を作り出し、このところ数年来、日本では「勝ち組」と「負け組」の分化がメディアをにぎわせている。

同じことが、アフガニスタンにも、中国にも、メキシコにも、東欧にも、エジプトにも、いえるに違いない。グローバリゼーションは、これを「言葉があること」のほうから見ると、光を広める動きだが、「言葉がないこと」のほうから見れば、世界に闇を広げる動きなのである。

なぜ内部にゆがみを蔵した日本発の「小さなもの」——「かわいい」文化——が、いま米国発の「小さなもの」——スヌーピーであり、ミッキーマウスであるもの——の優位を揺るがしつつあるのか。

日本のGNPならぬ「グロス・ナショナル・クール（Gross National Cool 国内ソフト・パワー総生産）」がもつ

ソフト・パワーとしての潜在力について煥発力ある論文を書いたダグラス・マックグレイは、現在のジャパニーズ・クールとアメリカン・

クールの争闘において肝腎な要素は、「文化的な正確さ」でもなければ「正統的なアメリカ起源」でもないと述べ、Tシャツに銘打たれる

「Harvard（正しくはHarvard）University」のロゴやポテトサラダのピザのような、本国人から見れば首をかしげるようなうさんくさいフェイクなアメリカ文化の日本での横行に

注意を喚起している。どのくらい自覚的かはわからないが、彼の直観

は正鵠を射ている。ジャパニーズ・クールの本質は、それがうさんく

さいアメリカもどきであること、偽物の欧米化であること、偽物のグ

ローバル・スタンダードであること、その意味で「言葉がないこと」

言葉をもたないこと」の表現であることにこそある。新しい独創的な

対抗原理がそこにあるのではない。戦後日本は占領期以来、「アメ

リカもどき」の「追従にどこまでも似た抵抗」、「抵抗にどこまでも

似た追従」を通じ、政治方面での壊滅的な低迷に並行しつつ、「言葉

をもたないこと」の文化表現の力を養ってきた。その結果、半世紀の

経験を経て、いま自分も予期

しなかった形で、その副産物の勃興を見ている。あの、『古事記』に描かれた口のない海鼠こそ、ハローキティの先祖なのではないだろうか。

これに対し、さほど準備のない——本国でなら「言葉をもたない」階層に分類される——個人でも、アメリカ人でさえあれば、「光の言葉」の母国語使用者（ネイティブ・スピーカー）として、日本で、現在隆盛の語学学校の英会話の教師になれてしまう。こうした挿話が示すように、いまやグローバリゼーションの波の中で、ミッキーマウス、スヌーピーをはじめとする欧米の文化産物は、すべて米国の「本国」以外では、正統的な「言葉をもつこと」の使節として受け取られ、「光の言葉」の後光を身に帯びざるをえない。ミッキーマウスが

文化的に劣位な鼠であることに明らかなように、それらはかつて本国において劣位の「言葉をもたないこと」の表現であり、そうである

ことで、本国同様、他の国においても、人々に訴えかける力をもっていたのだが、いまや、グローバリゼーションの波に洗われるさまざま

な国で、ミッキーマウスもスヌーピーも、グローバリゼーションの本

国たるアメリカからの到来者、いわば文化使節として正統的かつ優位

な神と感じられる。その傍らにフェイクな精霊たるハローキティや

セーラムーンを置いてみよう。そうすれば、ミッキー、スヌーピー

は立派でお偉い「識字者」であり、よそゆきであり、時には少々、

抑圧的、さらにはマツチョにすら、感じられる。彼らはいまや、気楽

な友達であるには、ほんの少し抑圧的なのである。（中略）

マイクrosoft社は否定しているが、かつて同社のビル・ゲイツ会

長がハローキティの権利を六千億円で買い取りたいと申し入れたとい

う挿話は、喚起的である。彼が、スヌーピーではなく、ハローキティ

に目をつけたのは、そこに、よりマイクrosoftにはないものがある

と感じたからだろう。そこに彼は何を見たのか。筆者の考えをいえ

ば、ビル・ゲイツの中で、口をもたないハローキティは、未知の「言

葉がないこと」の力を、体現している。

（加藤典洋「グッバイ・ゴジラ、ハロー・キティ」による）



理想的なものとは現実を超えたものことだ。現実にはない、現実とはどこかちがうところにある、それが理想的なもののありようだ。

古代ギリシャの哲学者プラトンは、そんなありかたをする理想的なものを「アイデア」と名づけた。理想的な人間、理想的な馬、理想的なオリーブ、理想的な家、理想的な都市、理想的な政治……それらはこの現実世界のうちには存在せず、どこか別の世界にある。そして、現実の人間、馬、オリーブ、家、都市、政治その他は、人間のアイデア、馬のアイデア、オリーブのアイデア、……を手本として、それに似るように作られている。が、それらが現実のものであるかぎり、アイデアの完全さに達することはできない。それがプラトンのアイデア論の骨子で、芸術作品も、人間が作りだした現実の存在である以上、アイデア（理想的なもの）ではなく、アイデアの不完全な模造品だ。

理屈としては筋が通っているが、芸術作品を前にしたときのわたしたちの感覚とは大きくずれる考えかただ。観音菩薩のアイデアが現実世界とは別のどこかに——たとえば作者の想像世界に——存在し、それを手本として作られた不完全な模造品が目の前の百済観音だ、とはどうしても考えられない。制作にかかる前に作者の頭のなかに像のイメージがあり、それが制作の導きとなった可能性は十分にあるが、出来上がった作品を見ると、頭のなかのイメージや、さらにそのむこうにあるとされるアイデアのほうが、曖昧かつ不完全なものであつて、それを明確な形に表現した現実の作品は、形なき理想らしきものを形の理想へと高めたものと思えるのだ。だからこそ、見るほうは氣息を整えて、静かにゆつたりと作品に対峙したくもなるので、作品のむこうにアイデアをうかがうのは、芸術とつきあう楽しみをわれから放棄する所業のように思える。

絵の場合、話はもっと分かりやすい。
たとえば、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」の美しさは、モデルとなった女性の美しさをはるかに超えるものではなからうか。絵のむこうにモデルとなった美しい女性を想定し、そのむこうに美しい女性のアイデア（理想形）を想定することは可能だ。しかし、「モナ・リザ」の絵（この際、細部まで写しとられた大判のカラー写真を絵の代わりと考えてもいいことにしよう）を見ていて、美しいモデルや、モデルのむこうのアイデア（理想形）に思いが行く

ようなら、それはもう絵を見ていないのと同じことだ。アイデアをいうなら、目の前に描かれてある女性の絵姿こそがアイデアであり、それ以上アイデアなどどこにもありはしない。それが傑作の傑作たるゆえんだ。ダ・ヴィンチは絵の細部においても全体においても、女性の理想形を——永遠に女性的なるものを——追求しているといえるので、その理想形が縦77センチメートル、横53センチメートルのキャンバス上に見事に定着されているのは、やはり不思議なことといわざるをえないのである。

時代が下つて、ポール・セザンヌが故郷の山を描いた「サント・ヴィクトワール山」について同じことがいえる。同じ題名の絵が何枚もあつて、その一枚一枚が、山の理想的な美しさの追求にあるいは、山とは何かという問いへの解答、あるいは、山というものがこの世に存在するその存在の意味の解明、といったふうな試みだが、表現された山は、その一つ一つがこれこそが山だ、山とはこんなふうにあるものだ、と感じさせる。その意味で、そこに定着されているのは山の理想形といつていいのである。

理想形が、絵ならば絵具を塗りかさねた布のキャンバスとして、彫刻ならば大理石の塊やブロンズの塊や木の塊や粘土の塊として、音楽ならばリズムとメロディーとハーモニーを備えた音声として、目の前に、あるいは、耳に聞こえるように、ある。くりかえしいえば、それが芸術作品の基本的なありかたであつて、作品を楽しむ側からいえば、目に見え、耳に聞こえる物との感覚的なつきあひを通して、形や色や音の理想的なすがたを感じ受けるのが喜びの源だといえる。芸術作品に接するとき、わたしたちは、現実を超えた理想的なものが、いま、ここに、現実のものとしてある、という矛盾を楽しんでいるのだ。

（長谷川宏『高校生のための哲学入門』による）



日本の理想の上役像は次のようなアンケートに明らかだ。二人の課長がいる。上役としての実務能力も充分なことは二人とも一緒。ところでA課長の方は無理な仕事もいつけない。無理な怒り方もしない。考課査定も公平だ。だが公務を離れて部下の面倒を見てくれない。

B課長は無理な仕事もさせる。怒るのも無茶なときがある。査定はだいたい公平だが、ときとして感情が入る。しかし部下の面倒は仕事関係を離れてもよく見てくれる。どちらの上役のもとで働きがいがあるか。そういう問いを出す。

日本では八十パーセントがBを選ぶ。Aを選ぶのは十パーセント前後である。知識人でも七十対十五ぐらい。アメリカは正反対である（林知己夫『日本人の国民性』）。これは戦前戦後を通じ、共通した日本人の特性だ——もっともアメリカでもだんだん日本的になって来ているそうだが。——

では部下のことを思っている上役とは、具体的にどういう人のことか。たとえば、部下を出張に出す、大事な契約である。午後八時まで成功したならば報告を入れよ、不成功ないしは努力中ならば報告するなどと約しておいたとする。さて電話がなかった。そのときに、これがアメリカであつたら、仕事の契約がうまく行かなかったということだけを考えればよい。そしてすぐそれに対応した処置をすることです役の仕事は果たされる。

ところが日本の場合、職務上の処置をすると同時に、あの男は気が強いように見えるが、実は弱気で酒飲みで寂しがりやだ。だめだったとなるとヤケになり、バーへ行くにきまつている。そういうとき、とりわけあいつは女にもてない。今ごろは殴られるか、大阪なら道頓堀へでもはまっているのではないだろうか、というようなまったく会社と関係のない、個人への思いやりがきわめて自然に頭に浮かんでこないかぎり、日本では上役としてうまくいかない。部下を把握できないのだ。部下は、上役というものは職務上の上役で、仕事がよくできるといふことだけで上役像を描いているのではなくて、自分のこと、俺のことを知ってくれるという形で上役像を描いているのである。

ある調査で、社員の行くバーへ盗聴器をしかけ、上役の悪口を全部集め社員意識というものを考えようとしたことがあった。純粋に学問的な試みだったのだが、プライバシーを害するというわけで途中で廃止された。それによるとおもしろいことに、どこでも、いつでも平社員は集まるとみな上役の悪口をいつている。

はじめの間は、その悪口は充分に具体的なのだが、酔っぱらってくるとみな同じ文句になってしまふ。それは上役は「俺という人間がちつともわかっていない」という文句である。それは今度の自分のやった仕事を認めてくれるとか認めてくれないというのではない。俺という者がわからないという駄々っ子的不平なのである。つまり、部下は人間味のある付き合いを求めている。それが可能な上役には全幅の信頼をよせる。

この人間的に裏打ちされている人間関係こそが、日本の会社のタテの関係のおそろしい強味であろう。（中略）

そこから公私混同もよろしいという変な結論さえ引き出せるのである。わたしは友人とともにある会社を視察に来た外人と、夜の十一時ごろ、バーへいったことがある。そこで、ある電子顕微鏡を作る会社の社員が喧々囂々と議論していた。十二時になつても終らない。そこでその外人が驚いて、いったいこの会社の社員で、なにをやっているのだ、と聞く。こちら悪口はいえないから、あれは会社の話で、今度売り出した電子顕微鏡の販売法の検討反省会をやっているのだといつてみた。まあ当たらずといえども遠からずであろう。彼は、日本の会社は偉い、超過勤務手当も払わずに、十二時まで人を使っている、とふしぎな感想をもらし、これだから日本の会社はこわいのだと感嘆した。

たしかに向こうでいえば、仕事は勤務時間内しかやらない。勤務時間がすぎたとたん、自由な私的個人となる。それをこえて働くのは管理職だけである。日本は、八時間の労働の間はアメリカみたいに締めつけられないが、二十四時間中、会社員たることから逃れられない。それが可能なためには、終身雇用や年功序列にもよるが、公私混同が許されているという条件も大きく働いているのだ。

（会田雄次『日本人の意識構造』）



彼は地方公務員だ。

東京郊外の市役所の健康保健課という、傍目には地味な職場で働いている。しかしだれかから職業を尋ねられた場合、彼はいたずらっぽい笑顔を浮かべながらこう答えることにしている。

「ボクシングのレフェリーです」

相手が意外そうな顔をして何か尋ねたそうにしたなら、
「本業は公務員なんですけどね」

とつけ加える。ボクシングのレフェリーだけで飯を食っている人間は、日本に存在しない。たとえ世界タイトルマッチのレフェリーをとめたとしても、ギャラは高が知れている。ましてや彼のように初心者で、四回戦のレフェリーしかつとめたことがない者は、ほとんどがノーギャラである。ようするにボクシング好きが昂じて、趣味としてレフェリーを選んだ者ばかりなのだ。

もちろん彼も、そんなボクシング好きの一人だった。(中略)

大学を出て、公務員としての地味な毎日を一年ほど送ったころになつて、彼は唐突にボクシングに目覚めた。きっかけは、高校時代の友人がプロボクシングのライセンスを取得し、遅いデビューを飾ったことだった。応援にかり出されて、初めて訪れた後楽園ホールの客席で、彼は今までに味わったことのない興奮を覚えた。もちろん今までにテレビで観たことは何度かあったが、生の試合は全く別物だった。

生身の人間と人間が、地位でもなく名誉でもなく金でもなく、もっと崇高な何かのために殴り合う。リングに上がったボクサーは、ただ相手を倒すためだけにそこに生きている。その圧倒的な存在感は、曖昧きわまりない人生を歩んできしまった彼にとって、まさに驚きだった。

以来、彼は暇を見つけては後楽園ホールへ通うようになった。別にタイトルマッチでなくとも、四回戦でも六回戦でもいい。ボクサーのそばにいて、同じ空気を吸い、同じ興奮を分かち合うことが彼にとつては大きな喜びだった。(中略)

初めて彼がリングに上がったのは、四月半ば——桜が散ったころだった。(中略)

試合に先立って彼は二人のボクサーをリング中央へ呼び、マニュアル通りに試合上の注意を与えた。声が震えているのが、自分でも分かった。ゴングの前に客席を見回すと、四回戦にしては意外なほど客が入っていた。デビュー戦同士だから、応援の友人知人たちをできるだけかき集めたのだろう。全員が、二人のボクサーを食い入るように見つめるばかりで、レフェリーの彼に気を止める者は一人もいなかった。しかし彼は満足だった。

試合は白熱した内容だった。二人の選手は技術こそなかったが、負けまいとする気迫は世界ランカーに劣らないものがあつた。玉砕覚悟のやみくもなパンチの応酬で、三回半ばには双方とも血まみれになった。ブレイクを分けるために割って入るたびに、彼の白いシャツにも血糊がついた。

三人ともに必死だった。

結局、四回に赤コーナーの選手が放ったまぐれ当たりのアッパーで、青コーナーの選手はマットに沈んだ。壮絶な試合だった。赤コーナーに近い客席からは、潮騒のような歓声が上がった。その歓声は、すべて勝者のものだ。レフェリーの彼のために拍手をおくる者はだれもない。しかし彼は、今までに感じた経験のない深い充実感に浸ることができた。

「俺はリングに立った」

控え室で血のついたシャツを脱ぎながら、彼はつぶやいた。

「俺は闘った」

相手はいないけれど、お前は勝った。よくやった。よくやった。そう自分に言い聞かせている内に、彼は涙がこぼれてくるのを抑えられなくなった。

二十数年間の人生で、彼は生まれて初めて何ものかに勝つ喜びを、ひそかにかみしめていた。
(原田宗典「レフェリーの勝利」、『人の短編集』)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

戦後教育システムは、生徒に希望を与えるシステムとして大変よく機能した。それは、

(1) 能力に合った職に送り出す機能を果たし、生徒に将来の見通しと安心を与えた。つまり、これくらいの学力があればこれくらいの学校を出て、これくらいの職に就ける(女性は、これくらいの人と出会え、これくらいの生活ができる)という期待ができた。

(2) 過大な期待を諦めさせる機能を果たした。特定のパイプラインに乗れなければ、特定の職に就くことを諦めるしかなく、パイプを流れる過程で、徐々に諦めがついた(いくら医者になりたくても、医学部に入る学力がなければ諦めるしかない)。

(3) 階層上昇の機能(世代内上昇+世代間上昇)を果たした。少しでも頑張つて勉強すれば、上の学校に行けて、よりよい生活が送れるという期待がもてた。そして、親よりもよい学校に行けば、父親以上の職に就ける(女性の場合は、そのような相手と結婚できる)という期待がもてた。

一九九〇年代後半、経済社会構造の大きな転換が起こったと考えられている。それは、物を作つて売るという工業が主要な産業であった時代から、情報やサービス、知識、文化などを売ることが経済の主流になる時代への変化である。これを、クリントン政権の労働長官だった経済学者のロバート・ライシュにならつて、ニューエコノミーと呼ぶことにしよう。

グローバル化によつてニューエコノミーの日本への浸透が本格化すると、職業世界が不安定化する。これが、教育システムに波及した結果生じたのが、学力低下を含む教育システムの危機だと私は分析している。

ニューエコノミーでは、物作り主体のオールドエコノミーとは違って、商品やシステムのコピーが容易である。そこで生じるのが、コピーのもとを作る人と、コピーをする人+コピーを配る人への分化、マニュアルを作る人と、マニュアル通りに働く人への分化なのである。それは、将来が約束された中核的、専門的労働者と熟練が不要な使い捨て単純労働者へ、職業を分化させる。そして、

グローバル化による競争激化や金融危機がその傾向を加速させる。そして、その影響はまず、若者を直撃する。

企業は、若者を選別して、能力のあるものは中核社員、専門的社員として優遇、それ以外は、派遣、アルバイトなど保障のない労働者で置き換えようとする。その結果、非正規雇用者が大量発生する。それが、日本では、フリーターの増大として表れるのだ。

一方で、旧来型の産業・職は、徐々に衰退局面に入る。工場はアジアに移転し、メーカーは工員を大量に採用しなくなる。IT化は、営業や事務、販売職の(熟練を前提とした)正社員を不要にする。しかし、日本では、職に応じて学校数が調節されるわけでもなく、教育機関としての学校は残り続けた。(中略)

工業高校を出ても正社員工員になれない人、女子短大を出ても企業一般職になれない人、文系大学を出ても上場企業ホワイトカラーになれない人、そして、大学院で博士号をとつても、大学専任教員になれない人が溢れ出す。それが、さまざまなレベルでのフリーターの出現となつて表れる。彼らは、学校が想定する職に就くという「ささやかな夢」さえも叶えられなくなっている。

そして、重要なのは、パイプがなくなつたわけではないことである。大卒だからといってホワイトカラーになれないということは、大学に行かなくてもいいことを意味しない。大学に行かなければホワイトカラーになることはもつと難しいということである。

その結果、パイプから漏れた人は、「勉強」という努力が無駄になる体験を強いられることになる。別の職に進んだり、また別の学校に入り直したらと言えればいいが、それは、今までしてきた努力が無駄になることを自ら認めることになる。親は、自分の子どもの教育にかけてきたお金とエネルギーが無駄になることに、心理的に耐えられない。

(山田昌弘「希望格差社会とやる気の喪失」より。一部を改める)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「則天去私」というのは晩年の漱石が作った言葉です。天に則って私を去る、「私」なんてない、というのは「西洋近代的自我」すなわち「私は私であり、その個性は意識にのみある」という考え方に対する、日本人としての反発だったのではないのでしょうか。

戸籍制度や漱石の思想から見れば、こうした近代化というのは明治時代に始まったと考えられます。しかし、日本の場合、こうした思い込みがここまで確立されたのは戦後でしょう。戦後は、それまでの日本的な考え方を「封建的」の一言で片付けてしまった。

今では葬式といえば火葬があたりまえですが、高度成長期の前までは土葬も別に非常識な手法ではなかった。これがあつという間に、より死体を遠ざける方向に向かつていった。出来るだけ「死」を日常生活から離していった。考えないようになった。

ほぼ同じ時期にトイレでも同じようなことが起きた。つまり水洗便所の普及です。あれは人間が自然のものとして出すものなるべく見えないように、感じないようにしたものです。(中略)

同様に戦後消えていったものはたくさんあります。お母さんが電車の中でお乳を子供に与える姿も見なくなつて久しいように思います。肉体労働者がフンドシ一丁で働かなくなつたのはもつと前からのような気がします。(中略)

このへんのことには皆、共通の感覚があるのがわかりでしょう。身体に関することが、どんどん消されていったのです。

これは都市化とともに起こつてきたことです。それも暗黙のうちに起こることです。世界中どこでも都市化すると法律で決めたわけでも何でもありません。それでもほぼ似たような状態になります。これは意識が同じ方向性もしくは傾向をもっているからです。

都市であるにもかかわらず、異質な存在だったのが古代ギリシャです。ギリシャ人はアテネというあれだけの都市社会を作つておきながら、裸の場所を残していたのですから。彼らにとつては裸が非常に身近だった。

誰もが知っているのがオリンピックです。これはもともとは全裸で行つていた大会です。マラソンだつて何だつて全裸です。マンガ

や絵本のようにイチジクの葉なんか付けていません。スポーツに限らず、教育機関、当時のギムナジウム(青少年のための訓練所)でも皆裸でした。

もともとギムナジウムという言葉は「裸」を意味していたのです。おそらく裸であることの根拠は今で言う「裸の付き合い」というのに非常に近かつたのではないかと。

アテネ型の民主主義の前提は、市民全員が平等だということです。これは誰でも裸の付き合いが出来る、ということでしょう。着ている物や何かで判断を受けない。若い人たちはギムナジウムでは平等だった。民主主義の原点は「裸の付き合い」にあった、というのは興味深いことです。

ギリシャとは異なり、ローマ帝国にはこうした「裸の文化」はなかった。もちろん共同浴場とかそういう場所では裸になっていました。しかし、別にそれは社会の制度と結びついていたわけではありません。

ルネッサンス時代の彫刻は、ギリシャ時代の裸のモデルの彫刻を写したのですが、別にルネッサンス時代の人々が裸だったわけではない。レオナルド・ダ・ヴィンチは裸で暮らしていたわけではありません。彼らの彫刻の題材が裸であつても、それは着物を着た連中が裸を創っているわけです。よく一緒にされてしまいがちですが、ギリシャ彫刻のように、もともと裸で過ごしていた人たちが裸の彫刻を創るのでは、意味がまったく違うのです。

もちろん、今ではなぜ古代ギリシャ人たちが裸だったのか、文献で証明することは出来ません。そんなことの理由をくわしく書いている本はないのです。こういう共同体全体が持っている無意識のルールというのは、往々にして記録されません。

ただし、彼らにとつて今の私たちよりも身体というものが身近だったのは間違いないし、それが社会的に何らかの作用をしていたと考えたのではないのでしょうか。

(養老孟司『死の壁』による)



そもそも本能を定義することはきわめてむずかしいが、とにかく本能というのは行動と切り離せない概念である。人間をも含めて動物の行動のごく基本的なモデルとして、ローレンツの古典的なモデルがある。ここに一個の水槽があり、上からたえず水が流れこんで水槽内にたまる、このたまった水がいわゆる衝動にあたる。水層の下部には蛇口が一個あり、それに栓がついている。適当な刺激によって、この栓がひつぱられてぬけると、蛇口から水が噴きだす。この水の噴出が行動を示すものとするのである。

水が噴出するかどうか、つまり行動がおこるかかどうかは、衝動の大きさ（水槽内の水圧）と刺激の強さによってきまる。しかし、どんな型の行動がおこるかは、蛇口の形によってきまる。同じ衝動にもとづく同じ種類の行動でも、その型は動物の種類によってちがう。つまり、動物の種類によって蛇口の型がちがうのである。多くの動物では、蛇口は生まれつき完成されており、その型は遺伝的に決まっています。同じ種類の動物は、同じ条件のもとではほとんど同じように行動する。学習する必要はほとんどなく、たとえその必要が多少あったとしても、蛇口をすこしけずって変型する程度のもので、型の本質的な変更には至らない。このように、種によって一定の、遺伝的に型のきまつた蛇口にしたがった行動がおこる場合を本能というのが、動物行動学での共通見解であるようにおもわれる。

このような観点に立つて人間をみたら、どうなるであろうか。書店にいくと、育児百科のような本や別冊付録がたくさんある。もし、人間に育児行動のための蛇口が遺伝的に備わっているのなら、こんな手引書はいらないだろう。子供を産んだ女性は、何一つ教わらなくとも、本来もっている遺伝的蛇口にしたがってすらすると育児ができるはずだからだ。しかし現実にはそうでない。人間には、動物行動学でいうような育児本能はないのだと考えたほうがよい。あるのは育児衝動だけなのである。（中略）

人間について日常安易にいわれている「本能」は、すべて衝動と

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

いかえられるべき性質のものである。このことはフロイトの文脈からみても明らかなのであるが、本能という言葉の魅力は依然おとろえているようにみえない。

実際には人間の行動は、遺伝的制約からかなり自由であり、その蛇口の多くは社会や文化の影響のもとに作られるものと考えられる。その点を見のがして安易に本能という言葉を使っていると、いつのまにか、この言葉のもつ雰囲気（ふんいき）にひきずられて、社会の制約から解放された人間本来の姿という幽霊（ゆうれい）をつくりあげることになる。本来的なものはむしろ衝動であり、しかも現実（じつじ）にそれを満たす方法すなわち行動の型のほとんどが社会と文化の中でしか形成されえないものである以上、「社会のくびきから本能を解放する」ことは単なる幻想にとどまる。

けれど、人間の行動もじつは動物的なレベルからそれほど脱（だつ）しているわけではない。たしかに人間には遺伝的に決まった一定の行動がごくすくない。しかし社会のコミュニケーションという点では、これではいちじるしく不便である。そこで社会的に、とくに支配者の暗示のもとに一定の行動型が設定され、それがしきたり、制度、あるいはいわゆる良識として確立される。すると人間の行動型が遺伝的制約から自由であるという、まさにそのことのために、多くの人々にはいつのまにかこの型の蛇口（じやぐち）がはめられてしまう。

もちろん思想や発想の形式にも相応する蛇口（じやぐち）（良識なるものの大部分はこれであろう）がはめられる。思考と行動の蛇口は相補って、しばしばどちらもきわめて固定的なものとなりがちである。そして人々がこの蛇口を通して行動していることを意識しないという点でも、そこには動物における本能（じやぐち）とたいへんよく似た性格があらわれてくる。つまり文明は本能を抑圧（よくあつ）するのではなく、本来存在（ざん）していなかった本能に代わる、代理本能（だいりほんのう）ともいべきものを作り出すのである。その結果いささか逆説（さかてき）めいてくるが、人間は文明によって動物から脱（だつ）するのではなく、むしろ逆に動物のレベルにひきおろされるのである。もしそこから脱却（だつてつ）したいとのぞむなら、ありもしない本能の解放をめざすのではなく、この代理本能とその産物をたえず否定してゆかねばならないであろう。

（日高敏隆『人間についての寓話』による）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ゲーテがその色彩論を活発に展開したのは、ニュートンの物理学的な光学に立った色彩理論をどうしても認め難いと思ったからであった。彼は述べている。ニュートンの光学にもとづく色彩理論は、この一世紀以来世の中に君臨してきているが、それは屈折光線というきわめて限られた事象を基礎にして築かれているにすぎない。そのために、光と色について、それ以外の重要な現象はほとんど無視されることになってしまった。

それに対して自分は——とゲーテは続ける——、光と、光に対立する闇とが両々相まつて初めて色彩を生み出すのだと言いたい。ニュートンの犯した誤りは、彼が行なった実験そのもののうちに見出される。プリズムを通した白色光が色彩を生み出すためには実は「境界」が必要なことをニュートンは見落としたからである、と。このゲーテの批判そのものは、ニュートンの実験を自分に引き寄せて解釈しただけの空振りに終わった。

だが、空振りによってゲーテの考え方は、まったく無意味に終わったわけではない。彼はニュートンの光学理論が見落としていた色彩のもう一つの側面をとらえていたからである。ゲーテが見たのは人間経験としての色彩現象であり、その代表的なものは「補色作用」である。彼の挙げている例でいえば、白壁に黄色の紙片を貼り付けてじつと見つめていると、それは紫色に見えてくる。また、夕焼けに照らされてブロッケン山の雪が赤みがかった黄色い光を放つとき、その雪の影の部分は青紫色を呈するのである。

そのような補色作用をもつと端的に示す実験装置としては、次のようなものがある。すなわち、ここに、交差する白色光と赤色光の二つの光源を用意する。そして、それらの光の交差した前に片手をかざして、壁面に映った影を見てみると、その影の一つは「赤色」に、もう一つはその補色の「青緑色」に見えるのである。

この場合、なぜそこに、まるで気配さえもない青緑などという色が出てくるのであろうか。このような事実は、色は一定に波長から構成されているというニュートンの考え方からは、どうやっても説明することができない。たとえば、波長についての計測装置を使っ

ていくらその影の部分の光の構成を調べてみても、青や緑と呼ばれる波長は少しもそこに検出されないからである。興味深いのは、W・ハイゼンベルクのような現代物理学の革新者が、彼自身の見地から、近代科学の知を超えたゲーテ的な色彩論を高く評価していたことである。

コンピュータの性能としての表現可能な色数は、いうまでもなくニュートンの光学理論の発展に基づいて技術的に可能になったものである。しかし現在、人間経験としての色を表わそうとするときには、それを、ゲーテ的な色彩の考え方によって補わねばならないだろう。実際の色の感知というのは最終的には人間の色彩経験であって、単に客観的な現象ではないからである。

(中略)

コンピュータによつて一六七〇万の色が発色できるようになったということは、一見それだけ色が高度に客観化されたようにみえるが、果たしてそうだろうか。かつて、某大家電メーカーの研究所の上級研究員の人から、興味深い話を聞いたことがある。それは、日本から世界中の諸国にテレビの受像機を輸出する際に、どのように色彩の調整を行なうかという、その国の大多数の人々の皮膚の色がもつとも美しく見えるように、調整して送り出すのだということであった。だから、欧米などのテレビでは、日本人の顔がひどく黄色っぽく見えることになるのである。

色というのは人間の知にとつて「最後の秘境」であるとの私の確信はいよいよ強まっている。

(中村雄二郎「色という最後の秘境」一九九六年による)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

一般に人間には対象のなかに自分と同質の生命を感じとる能力があつて、この共感によって対象の生命と一体化することを感情移入という。そして犬や花であれ無生物の人形であれ、とくに自分より小さいものに感情移入が起ころのは対象を可愛いと感じるらしい。そういう感情移入が起ころのは対象の形や性質にもよるが、それ以上に人間の心の側の積極的な能力によつてゐる。現に実際には生命のない人形を可愛いと思うのは、明らかに特定の文化に育てられた心の作用の結果だろう。

ところで、この心の作用はもともと「可愛さ」とは関係がなく、もつと広く物神崇拜という伝統的な精神の文化のなかで働いていた。巨大な岩石に畏敬を覚えたり、日常の食物や道具を「もつたいたい」と感じるのは、そういう文化の現れであろう。いうまでもなく巨石も一粒の米も可愛いものではなく、むしろ人が頭を垂れるべき対象であつた。それをいえば人形も古代では可愛さの対象ではなく、恐れたり願をかけたりするまじないの道具であつた。なまじ人間の形をしてゐるからややこしいが、人形は人間以上に大きい生命の象徴であつて、いわば物神崇拜の精神を凝縮して具象化した対象だつたようである。

これにたいして一匹の子犬に可愛らしさを感じるのは、これまでもつと直接的な生命の共感によるものと考えられてきた。大きな点でも子犬は人間を超えた生命の象徴ではなく、逆に人間より弱く小さな生命の持ち主である。それを愛するのは物神崇拜とは別の文化の現れであり、動物愛護と呼ばれる精神の発動だと考えられてきた。いったい動物愛護の感情がいつ生まれたか定かではないが、おそらく十七世紀ごろの近代的な自然観の誕生と何らかの関係があるだろう。

ともかくそれは一粒の米をもつたいたいと思う感情とは異なり、むしろ人間の子供を可愛がる感情に似ていると見なされてきた。そしてたぶん人形が人に可愛がられる対象に変わったのも、こうした文化の歴史的な変化と並行してゐたはずである。

だが人形が初めて可愛い存在に変わったとき、それはおそらく人間の想像力の多大な発揮を必要とするものだつただろう。形も単純だつたし、もちろん自分の力で動くものではなかつた。犬や猫のような愛玩動物とは違つて、向こうから人間の感情移入の働きを誘発する存在ではなかつた。これには直接的な生命の共感が難しいだけ

に、人間はより多く努力して実在しない生命を読みとる必要があつた。いいかえれば人形を可愛いと感ずるためには、人は物神崇拜の文化を失いながら、物神崇拜のために求められるような強い想像力を要求されていたはずである。やがて何百年もの歳月をかけて、人間は少しずつ人形を可愛がる感情を育て、同時に可愛らしさをそる人形の形状を生みだしてきた。しかしそれでも、近代文化は人形と愛玩動物のあいだに厳然たる区別を置く一方、どんな単純な人形にも生命を感じとる感受性を残してきたのである。

こう考えると「アイボ」の出現はこの長い区別を攪乱し、物神崇拜と動物愛護の文化の終わりの始まりになるのかもしれない。まるで生きた動物のように反応する機械にたいして、人間にはそこに生命を読みとる強い想像力はいらぬ。可愛らしさは対象のほうからかつてにやつてきて、人間の受け身の心を直接にとらえてくれる。これを続けに行けば感情移入の能力は萎縮して、やがて動かない人形は可愛いものではなくなるかもしれない。同時に愛玩動物の可愛らしさも生物の特権的な特徴ではなくなり、少なくとも感情の次元で動物と機械との区別が弱くなることが考えられるのである。

すでに科学の世界では物神崇拜的な生命観は完全に否定され、生物と無生物の距離さえ大きく縮まろうとしている。法律の世界でも動物と物体の区別が捨てられ、飼犬を殺しても器物損壊としてしか罰せられない。そこへまったく思いがけない方向から、いま感情文化の世界にも同じ流れの変化が迫つてゐるのかもしれないのである。

（山崎正和「物神崇拜と動物愛護ののちに」による）



モーツァルトという人類史上まれにみる美を生み出した、近代西洋の機能と声音楽とは、人間にとつて何なのか、それを考えるために、私は若いとき、医者になるのはやめて音楽学を勉強しようと思ったことがある。音楽美学のように哲学的・抽象的な概念を問題にするよりも、音を聴くという具体的な感覚体験のほうからそれを考えようとしていたのは、私が医学部生だったからだろうか。

機能と声音楽では、ソシレの属和音の次にドミソの主和音が来ると、音楽が一段落したという終結感が生み出される。属和音にファを加えてソシレファの属七和音にしてやると、この終結感をもっと明確なものになる。これは、シの音が半音上がってドに向かおうとし、ファの音が半音下がってミに向かおうとする、この二つの音のもつ強い方向性のためである。ある音がそれ自身にとどまろうとせず、自らを離脱して別の音を求めようとする、ほとんど生理的といつてよい法的傾向、これが機能と声の基礎になっている。

平均律でどの半音も等間隔で並んでいるピアノのような楽器だと、それぞれの音は完全に均質化されていて、だからこそ転調というような技法も可能になるのだが、そこにひとつの調性が与えられたとたん、音階上のそれぞれの音に、他の音と異質な個性が生まれる。鍵盤上のすべての音は、音の高さ以外はまったく均質であるはずなのに、いったん調性が与えられると、どの音もそれぞれ異なった未来指向性を示すようになる。

この個性、たとえばシのド指向性は、人間の感覚にとつて抗いがたいもののようである。だからピアノと違って平均律に固定されていない弦楽器の奏者だと、シの音を弾く場合、この指向性に無意識にひきずられることになり、シをあらかじめドの方向に寄せて、つまり平均律より少し高く、純正調に近い音で弾こうとする傾向が出てくる。モーツァルトはヴァイオリンソナタを書くとき、ヴァイオリンのシとピアノのシがなるべく重ならないように注意していたらしい。音が濁らないようにという配慮からである。

調性が与えられると音が個性をもつようになる。調性が与えられるというのは、それを決める音がすでにいくつか聞こえたということである。つまり、音楽にその経歴が与えられたということであ

る。音楽が鳴りはじめると、あらゆる音は自らの経歴を、過去の想起（アナムネシス）を含むことになる。過去に鳴ったすべての音の積分として鳴っているといつてもよい。そしてこのアナムネシスが、現在の音の未来指向性（プロレプシス）を生み出す。シがドに、ファがミに進もうとするのは、調性のアナムネシスそのものが紡ぎ出す微分的な方向のプロレプシスである。属和音から主和音への進行が終わると、プロレプシスはそこで一段落となり、さらなる行動への要求が消えて、安定感と終結感が得られる。

生命的行動のアナムネシス・プロレプシス構造というのは、ヴァイツゼカーの理論を語るときに欠かすことのできない鍵概念である。人間に限らず、あらゆる生きものの主体的な行動は、物体の物理的な運動と違って、「そこから」と「そこへ」の性格をもっている。

それはつねに記憶に裏づけられた未来の先取だとヴァイツゼカーはいう。アナムネシス的な経歴に支えられたプロレプシス的な未来の先取りが、そしてそのみが、主体の主体性を可能にしている。だから主体というものは、つねに現在の最先端でプロレプシス的に未来を生きている面と、それまでの過去の全部をアナムネシス的に生きている面との、境界的性格をもつことになる。（中略）

人間の感覚は、このプロレプシスの意識とアナムネシスの意識とのはざまに「時間」を感じとる。時間という實在があらかじめ与えられていて、われわれがそれを消費しながら生きているのではない。生きるということは、行動の各瞬間が過去を継承しながら未来を先取することによって、その界面に時間という現実を生み出し続けることにはかならない。

（木村敏「音楽と時間」より）



読解問題 10月4週分

問1 読解マラソン集1番「近代から現代にかけての社会は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 老人にとっても、スポーツは、進歩・向上をめざすものである
B プロスポーツは、競技者が楽しんだり健康を維持したりすることが目的ではない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「近代から現代にかけての社会は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 仕事の論理で考えると、老年は価値の低下と見なされる
B じいさんやばあさんの炉辺の昔話は、老いを楽しめる社会を表している
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「のみならずシドニーの」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A スポーツにおける進歩は、現実の社会の進歩へと結びついている
B 工業化は、人間の能力を全面的に発達させることを要求してきた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「のみならずシドニーの」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A スポーツの意味は、社会の極端な効率化に抵抗する補完物という点にある
B スポーツ選手が国家という共同体に属していることは否定できない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「グローバリゼーションが」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A グローバリゼーションは、それを光と感じる少数と、闇と感じる多数を生み出してきた
B ジャパニーズ・クルールは、日本化されたミッキー・マウスやスヌーピーの中に見られる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「グローバリゼーションが」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ハロー・キティは、口を持たないことで、言葉を持つものに対する独創的な対抗原理を示している
B ミッキー・マウスも、かつては言葉を持たない抑圧された人に訴える力を持っていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「理想的なものとは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私は、百済観音の中に、プラトンの述べたアイデアを見る
B アイデアは、芸術作品を通して、人間が直接触れることのできるものになる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「理想的なものとは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A モナリザの絵画の向こうに、モデルとなった美しい人物やアイデアを見ることが芸術作品を味わうことである
B 芸術作品を楽しむということは、作品そのものを見たり聞いたりする感覚を楽しむことである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 11月4週分

問1 読解マラソン集5番「日本の理想の上役像は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本では、上役は、評価が公平であるよりも面倒見のよい方が部下から支持される
B アメリカでは、ほとんどの上役は、部下の仕事に関することだけに関わっている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「日本の理想の上役像は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本では、社員の悪口を黙って聞く上役が評価されている
B 日本人は、仕事の時間以外も会社員の意識でいることが多い
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「彼は地方公務員だ」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ボクシングのレフェリーだけで生活できるのは、ごく一部の人だけだ。
B 彼は、友人のデビューをきっかけにボクシングに目覚め、自分も見よう見まねでやってみた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「彼は地方公務員だ」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 初めての試合は白熱したが、レフェリーに注目する人はいなかった
B 初めてリングに上がったとき、かれは緊張と興奮でほとんど何も覚えていなかった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「戦後教育システムは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 戦後の教育システムは、若者の職業への割り振りにうまく結びついていた
B 若者の学力低下の結果として、ニューエコノミーの浸透が本格化した
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「戦後教育システムは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A IT化が進行したため、日本の製造業は工場をアジアに移転するようになった
B 学校を出ることが希望の職業につくことと結びつかない以上、学校に行くことはもはや意味がない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「『則天去私』というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 文化が発達すると、身体に関することがどんどん消されていく
B 「私を去る」という考えは、西欧の自我意識の考えとは対極にある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「『則天去私』というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ギリシア人が裸の文化を大切にしたのは、当時の気候が温暖だったからである
B ルネッサンス時代の人々にとっては、今の私たちの時代よりも身体が身近だった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 12月4週分

問1 読解マラソン集9番「そもそも本能を定義することは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A どのような型の行動が起こるかは、衝動の大きさによって決まる
B 人間には、もともと育児本能のようなものがある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「そもそも本能を定義することは」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 社会的に必要な行動型は、制度や良識として確立されている
B 人間らしく生きるためには、本能の解放をめざすことだ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「ゲーテがその色彩論を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ニュートンは、色彩には境界が必要だということを見落としていた
B ゲーテは、補色の中に、人間経験としての色彩を見た
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「ゲーテがその色彩論を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 人間の色の感知は、客観的な現象である
B テレビの受像機は、その国の人の皮膚の色を基準に調整されている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「一般に人間には」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 巨大な岩に畏敬の念を持つのは、物心崇拝の文化に影響されているからである
B 日常の食物に「もったいない」と感じるのは、物心崇拝の文化に影響されているからである
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「一般に人間には」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 生きた動物のように反応する機械にたいして愛着を持つには、強い想像力が必要である
B 法律の世界では、動物と物体は明確に区別されている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「モーツァルトという」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A ファの音は、常に半音下がってミに向かおうとする性質がある
B シにはドに対する指向性があるので、シを少しドから離して弾く傾向になる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「モーツァルトという」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 生き物の主体的な行動は、物体の物理的な運動と同じように「そこから」「そこへ」の性格を持つ
B 主体は、未来と過去の両方の面の境界に生きる面を持つ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

10～12月

小1 コード： nane パ ス： PDF	小2 コード： nane パ ス： PDF	小3 コード： nane パ ス： PDF
小4 コード： nane パ ス： PDF	小5 コード： nane パ ス： PDF	小6 コード： nane パ ス： PDF
中1 コード： nane パ ス： PDF	中2 コード： nane パ ス： PDF	中3 コード： nane パ ス： PDF
高1 コード： nane パ ス： PDF	高2 コード： nane パ ス： PDF	高3 コード： nane パ ス： PDF